<翻　訳>

ヨハネス・パウリ：冗談とまじめ (13)

Frühneuhochdeutsch 研究会訳
(代表　森　　昌弘)

ここに翻訳したのは1522年刊行のJohannes Pauli: Schimpf und Ernst第578話—第646話である（第577話までは『中京大学教養論叢』第30巻第4号，第31巻第3号，第32巻第2号，4号，第33巻2号，4号，第34巻2号，4号，第35巻2号，4号，第36巻2号，4号に所載)。使用テキストは1924年刊のJohannes Bolte編（リプリント版1972年）を用い，適宜H. Österleyの版，その他を参照した。聖書に関しては『聖書新共同訳』(日本聖書協会1987年刊）に拠った。パウリの聖書の引用はほとんどすべてラテン語で，時とすると現今の聖書に一致しない場合，あるいは多少記憶違いと思われる箇所もある。それ故彼自身のドイツ語訳と重複する場合も，異同を明らかにするために，煩雑にはなるがすべてラテン語を添えて訳してある。聖書以外のラテン語も同じように扱った。

この翻訳は，Frühneuhochdeutsch研究会のメンバーが分担して訳したものを，最後に共同で検討修正したものである（訳の分担表は下記)。1996年7月現在のメンバー氏名はつぎの通りである。青木一行（名城大)，大沢峯雄（名大名誉教授)，木野茂（藤田保健衛生大)，工藤康弘（三重大)，精園修三（中京大)，中条宗助（名大名誉教授)，橋本忠欣（福井大)，森昌弘（中京大)，山田やす子（皇学館大）(以上アイウエオ順)。

分担表

第578話—第585話	橋本	第586話—第593話	森
第594話—第600話	山田	第601話—第605話	青木
第606話—第613話	大沢	第614話—第620話	木野
第621話—第625話	工藤	第626話—第630話	精園

第631話—第634話　中条　　第635話—第638話　橋本
第639話—第642話　森　　第643話—第646話　山田

第五百七十八話　冗談
息子が税金の十ポンドを軽減したこと

ある町に一人の金持がおりました。彼はペニッヒ貨で十ポンド[1]の税金を払っていました。そして父親が死んだときには，息子の方は財産を使い果たしてしまいました。このことを非難されると，息子は言ったものでした。「私は昔の父より金持だよ。父は町へ毎年ペニッヒ貨で十ポンド払っていた。こいつを私は五シリングまで軽減しましたよ。この分はまだ払っているんですよ。」資産のない者は町へ毎年五シリング払わなければなりませんでした。息子もこの支払いはしたのでした。

第五百七十九話　冗談
男の子が体重をしばしば計られたこと

ある時，ある町に一人の悪童がおりました。しばしば拷問にあわされたのに，いつも無事に出所して，人々の前で言ったものでした。「町の旦那方は，俺の目方がどれだけか細かなところまでご存知です。皆さん方は俺の目方を頻繁に計っては，昔より俺の背を伸ばし，こんなに伸ばしてくれたのさ。」

第五百八十話　冗談
親を親とも思わない男のこと

一人の父親がいて，息子の性悪を叱りました。すると息子は，父親が息子を作ったことを非難しては，父に言いました。「誰か二人連れてこいよ，そうすりゃ俺も二人連れてくるつもりだぜ。そしてこの四人が，お前さん

1　カロリンガー朝の貨幣単位としては普通1ポンド（Pfund）＝240ペニッヒ（Pfennig），1シリング（Schilling）＝12ペニッヒが知られているが，地域や時代によって変動があり，この話に適用できるかどうか不明。

が俺を作ったことに対して，お前さんにお返しをすべきだと認めてくれれば，俺はお返しをするぜ。」

このようにおよそ子どもたちというものは父母に感謝しないものです。同様に幾人もの奴らがまた言っています。「お袋が俺を生んだことが何だって言うのかい。生むことは自然のことだ。お袋から俺が生まれたとき，お袋は俺から解放されて大喜びだったんだぜ。」こんな奴らは水死の刑にするがよいのです。

第五百八十一話　冗談
もし親父でも来たら，と言った遊び人のこと

ある時若い衆が賭をし，賽子を振って言いました。「ようし，十八番目の十二だ。俺の親父でも来れば，無効だ。」そこへ丁度親父が部屋に入ってきて，言いました。「どっこい，俺にや有効だ。」そして息子の髪を摑んで，部屋から階段の所まで引っ張り出し，その挙げ句，息子を階段から突き落としてしまいました。

第五百八十二話　冗談
ある男の河渡しをした男のこと

一人の男が水辺にやってきて，歩いて渡ろうと思いました。そこへもう一人百姓がやってきて，渡してくれるよう男に頼みました。男は言いました。「いいよ。」男は百姓を背負いました。水の中へ結構入ってきたとき，男が言いました。「あんたが代官でなければ，渡しゃしないんだけどな。」百姓は言いました。「わしはもう代官じゃないぞ。」そこで男は百姓を放り出し，百姓も歩いて渡らなければなりませんでした。

第五百八十三話　冗談
誰もある百姓を出し抜けなかったこと

ある時一人の百姓がいました。彼は宴席に出ると，自分の前にある無しに係わらず，いつも皿から一番良いものを取りました。誰もこの百姓を出し抜けませんでした。ある時一羽のローストチキントと，いくつもの小鳥のローストが出てきました。小鳥のローストは食卓の人数より一つ少なく

皿にのっていました。この百姓の口に入らないように，誰もが小鳥のローストを一つさっと自分の皿に取りました。するとかの百姓はローストチキンを取って，言いました。「皆さんが小鳥のローストを一つ取ろうというのであれば，わしも一つ取ることにしよう。」

またある時，みんなで賭をして，コップの上部を汚した者が全員の代金を支払うことになりました。この百姓が飲む番になると，いつも全部飲んでしまいました。それで，ぶどう酒には脂の浮きようがありませんでした。

第五百八十四話　冗談
司祭がエピファニア[1]を告げ知らせたこと

ある時一人のお粗末な村坊主がおり，ある日曜日，御公現の祝日を知らせることになっていました。するとこの坊主は言いました。「今週には，エピファニアといわれる大聖人の内のお一人の祝日があります。私はあなたたちにその祝日を祝うように命じます。その日はどの本にも赤色で書いてあって，本当に大事な祭なのです。」

第五百八十五話　冗談
商人がとんだ貴重品を持っていたこと

ある商人はいつもフローレンスからミラノへ商いに行き，高価な小物以外は持って行かないで，商品をすべて一つの袋の中に入れていました。かくしてこの商人が来ると，商人たちが皆我先に袋をものにしようと，商人のところに走ってきて，その袋の中に手を突っ込みました。商人は考えました。「この人たちに悩まされないために，どんな悪戯をしようか。」ある時この商人は袋に半分ほど人の糞を詰めました。商人たちがまた走ってきて持ってきたものを見ました。商人は言いました。「私は糞を持ってきたんですよ。どうか私を離して下さい。」ある商人が袋を取って，中に手を突っ込み，すっかり手を汚してしまいました。それ以降はもう誰もこの商人の

1　Epifania（epiphania）は「出現」の意であるが，ここでは一月六日の「御公現の祝日」，別名 Dreikönigsfest「三聖王来朝の祝日」のこと。

袋に近寄らず，他の商人と同様にこの商人にも商品を陳列させてくれました。

第五百八十六話　まじめ
一番悪いのは誰かということ

ある時ある領主が，哲学者である三人の賢者に尋ねました。「三悪人，悪い領主，悪い役人，悪い隣人の中で，誰が一番悪いか。」第一の賢者は主張しました。「悪い領主です。というのは，人に害を与えようとする意志があり，さらに他の二人にはない権力も持っているからです。」二人目の人が主張しました。「悪い役人です。貧しい人に害を与え，領主に訴えて，苦しい目に合わせます。」三人目の賢者が主張しました。「悪い隣人が一番悪うございます。というのは，隣人が秘めているものを暴き，役人や領主にその人を中傷します。まず第一に隣人に害を与え，その後，役人や領主に害を与えます。そしてこれらの人々の肉体，魂，名誉に害を加えます。彼は宗教上，道徳上の罪，法的な罪を引き起こし，刑罰を作り出します。それで，ユダヤ人がある人をひどく呪おうとする時，悪い隣人が与えられるようにと願うのです。」

第五百八十七話　冗談
子羊をなめる羊を見た狼のこと

二匹の狼がある時一緒に歩いていました。すると一匹の羊が，子羊の首の周りをなめているのを見ました。一方の狼が仲間に言いました。「おれたちがもし羊をなめたら，百姓たちは，おれたちのことで大声を出すだろう。」もう一方の狼が言いました。「それは噂のためだ。おれたちを信用しない習慣を，百姓たちにつけてしまったのだ。」

第五百八十八話　まじめ
シビュラ[1]が九冊の本を三百グルデンで提供したこと

ある時，裏返しにヴェールをつけた老婆が九冊の本を脇に抱えて，タル

1　Sibilla（Sibylla），ギリシァの女予言者。紀元前83年に焚刑に処せられた。

キニウス・スペルブス王[1]のためにローマへ持って来て，王に言いました。「王様，この九冊の本を買いませんか。」王は言いました。「いくらで渡すのだ。」彼女は言いました。「三百ドゥカーテンです。」王は言いました。「高い。一冊もいらん。」この老婆は，三冊を広間にあった火の中に投げ込み，燃やしてから王に言いました。「この六冊の本を買いませんか。」王は言いました。「いくらで渡すのだ。」老婆は言いました。「三百ドゥカーテンです。」王は言いました。「いらん。」彼女はさらに三冊燃やして，王に言いました。「 この三冊の本を買いませんか。」彼は言いました。「いくらで渡すのだ。」彼女は言いました。「三百ドゥカーテンです。」王は本を買いましたが，その中には，神の託身（受肉），ローマ帝国，その他のことについて，未来のことが沢山書かれていました。というのはこの女は予言者だったのでした。それで王は，他の六冊を手に入れなかったことを悲しんで，心を暗くしました。これらの本は，豪華に装丁され，ローマ市の宝物殿に南京錠をかけて収納されました。

第五百八十九話　冗談
なぐられて，幸と不幸を持った女のこと

ある時，ある人が所帯持ちに，妻をなぐって幸福と不幸にできるかと尋ねました。彼はできないと答えました。時折女の人の目の周りに青あざがあると，近所の人が言います。「目の周りが青いのはどうしたんだね。」彼女はこう言います。「夫がなぐったのです。」すると人々は言います。「あなたは大変幸せだったんだよ，目を無くさなかったんだから。」また彼女が片足を引きずっていて，それを尋ねられると，こう答えます。「夫になぐられて，くるぶしに当たったので，歩くことができないのです。」すると人々は言います。「くるぶしに当たったのは不幸なことだ。」これが幸と不幸になるのです。

1　Tarquinius Superbus. 古代ローマの帝国の最後の王（BC 534–BC 510）。

第五百九十話　まじめ
世の中を見ようとした男のこと

ある時ある人が，イェルサレムへ行こうとしましたが，それは世の中を見物するということのためだけでした。身内の一人が，彼に止めさせようとして，六マイル先まで手紙を届けさせるために，彼を使いに出しました。彼が戻ってくると，その身内のものは言いました。「あなたはもう世の中を見て来たね。世の中にあるのは，山と谷，畑と牧草地，森と道路と川，都市と村などだから。」

第五百九十一話　冗談
泥棒が絞首刑にされること

ある人が死刑執行人に言いました。「親方，あなたは先日，泥棒をきちんと絞首刑にしましたね。」この死刑執行人は帽子を取って言いました。「はい，旦那，私は泥棒の首を吊るしますが，別のには帽子を取ります。」

第五百九十二話　冗談
中傷者が軽蔑されたこと

あるカレッジに，十人から十二人の学生が一緒にいました。一人の新入生が仲間に入りました。ある時この新入生が，その場に居合わせなかった別の学生のことを悪く言いました。彼がいつまでもそれを口にしていたので，他の学生の一人が言いました。「君，彼についてのいろんなことを，どれくらいの間に知ったんだね。」彼は言いました。「四週間です。」するとその人は言いました。「私たちは恐らく六年彼と一緒にいて，そんなことを彼から経験したことは一度もないよ。」彼が中傷する人物であるということを，彼に分からせたのです。

第五百九十三話　冗談
木曜日に糸を紡がなかった女のこと

ある時ある聴罪師が，ある女性に迷信を持っていないかと尋ねました。彼女は答えました。「はい，木曜日に糸を紡がないということだけです。」

すると聴罪師は言いました。「それなら金曜日に，糸を巻き取ってはいけません。」

第五百九十四話　冗談
子供が泣きやんだこと

小さな男の子がいました。ある夜この子があまり大泣きしたので，父親も母親も眠れませんでした。真夜中に子供はしばらくの間泣きやみました。そこで母親は夫に言いました。「あの子は眠るようよ。さあ，私たちも眠りましょう。」子供はそれを聞いて言いました。「ぼくは眠ったりなんかしないよ。ぼくは泣き疲れたんだ。それでちょっと休んでいるだけだよ。後でお母さんたちが眠れないくらいまた泣きわめけるようにね。」

罪人たちも同じようなことをします。彼らはしばらく休んで，その後また罪を犯します。

第五百九十五話　冗談
夫をしらみ潰しと呼んだ女のこと

ある男が悪妻を持っていました。妻は夫に腹を立てると，夫をしらみ潰しと呼びました。夫はこれが嫌でたまりませんでしたが，妻は時には他人の前でも夫をそう呼ぶことがありました。夫は妻に，「その下品な言葉をやめろ。やめなきゃ大罰を与えるぞ」と禁じました。妻はやめませんでした。そしてある時妻はまた夫をそう呼びました。そこで夫は妻を庭の池の中へほうり込みました。妻は溺れそうになりものが言えなくなると，両腕を水から突き出して両方の親指を押し合わせて，まるでしらみを潰そうとするかのような仕草をしました。彼女は言葉で語れないことを動作でしたのです。

第五百九十六話　まじめ
Saltus Galteri（ガルテルスの跳躍）のいわれ，
海に飛び込んだガルテルスのこと

ノルマンディーに高い岩が一つあって，前には海が広がっています。その岩はSaltus Galteri（ガルテルスの跳躍）と呼ばれています。こんな事が

起ったのです。ガルテルスという名のおそらく少しぬけた男がおりました。ガルテルスは一人の娼婦がとても好きだったので，彼女が彼にしてほしいと望むことは何でも，心から喜んでしようと言いました。それで娼婦もその時言いました。「私もあなたのことがとても好きだから，あなたが私のためにして下さることを，私もあなたの後からするわ。」ガルテルスが一文無しになってしまうと，娼婦は彼と別れたいと思って，彼を岩の上へ連れて行って，言いました。「もしあなたが私のためにそこから海へ飛び込んでくれるなら，私もあなたの後から飛び込むわ。」ガルテルスは飛び込みました。娼婦はガルテルスがもがき，溺れるのを見ましたが，彼の後を追って飛び込もうとはしませんでした。その後間もなく娼婦は別の男を引っかけました。

宗教的にも同様です。多くの人々がお金のために地獄へ飛び込みます。そうさせるのは貪欲というお金の身内です。しかし情婦であるお金は，彼らの後を追って飛び込んだりしないで，別の男の所へ行きます。

第五百九十七話　冗談
妻の頭に中剃りをした男のこと

ある男の妻がいなくなってしまいました。男は坊さんのところに妻がいるのを見つけました。すると男は妻の頭に中剃りをして，言いました。「坊主の女房は皆，こうやって中剃りをしておらにゃならんのだ。」

第五百九十八話　冗談
死んだ母親を袋に突っ込んだ男のこと

ある村にけちな坊さんがおりましたが，金をもらわなければ，誰も埋葬させようとしませんでした。その村に一人の若者がいて，彼の母親が死にました。若者は坊さんに，母親のために教会墓地を与えてくれるように頼みました。坊さんは，若者が五シリング払わなければ，それをしてやろうとしませんでした。若者は貧しくて，金を持っていなかったので，言いました。「お坊様，私があなたに金をお払いするまで，担保を受け取って下さいますか。」坊さんは，「よかろう」と言いました。夕方になると若者は，死んだ母親を袋に突っ込んで坊さんの家へ運んで，言いました。「お坊様，

私は糸玉を詰めた袋を持って来ました。これは私の母が撚って，それで布を作ろうと思っていたものです。私があなたに金をお渡しするまで，これを担保に取っておいて下さい。」そして死体の入った袋を家の中へ投げ込みました。坊さんは階段を駆け降りて来て，母親の頭を摑んで，弟子に言いました。「これは大きな糸玉だぞ。」そして袋を開けました。すると死体のぴんと伸びた足が坊さんの胸をしたたかに打ちつけ，坊さんはすんでのところで仰向けにひっくり返るところでした。こうして坊さんは死体を無料で埋葬させねばなりませんでした。

貪欲な坊さんたちは，こうやって欺いてやらねばなりません。

第五百九十九話　冗談
屋根を葺かなかった農夫のこと

ある大修道院の地所に一人の農夫がおりましたが，そこにはあばら屋が一軒ありました。農夫と修道院長の意見がまとまり，修道院長が家を建て，その家の中で必要なことができるように，農夫が屋根を葺くということになりました。修道院長は家を建てさせましたが，農夫は屋根を葺かずに，ほぼ二年間家をそのままにしておきました。修道院長は農夫に，なぜ家をこのように屋根のないままにしておくのかと尋ねました。農夫は言いました。「院長様，もし雨が降れば，屋根屋は屋根を葺いてくれようとしません。天気が良ければ，屋根などいらないのですよ。」こうしてその家はそのままになっているのです。

第六百話　冗談
寺男が偉い様になったこと[1]

ある修道院に寺男がおりましたが，偉い方と一緒に歩くような時は，下僕が主人に従うように，その人の後ろについて歩きました。寺男は大変よく働きましたので，司教座聖堂参事会員に取り立てられました。その後彼は偉い方の横に並んで歩き，もう以前のように後ろについて歩きはしませんでした。そしてそのことについて尋ねられると，言いました。Honores

1　Herr と呼ばれる身分になったことの意。

mutant mores（名誉は人の性質を変ず。）「わしは今や偉い様になったのだよ。わしは彼と並んで歩くのが当然なんだ。」

第六百一話　冗談
床屋が鬚の半分を剃ったこと

シュトラースブルクでは，農夫の鬚を剃るのに，一ペニヒより安くしてはならぬと言う取り決めがありました。たまたま一人の農夫が床屋に来てこう尋ねました。「親方，髭を当たって貰うのになんぼ掛かるかね。」床屋は言いました。「一ペニヒだよ。」農夫は言いました。「一ヘラーで剃ってくれんかね。」「いいよ」と親方は言いました。農夫は腰掛けました。さて床屋は農夫の鬚を半分だけ剃ると，掛け布を外して言いました。「お疲れ様，一ヘラー分剃れたよ。」「そうさね，横のもう片方の鬚も落として貰わなくちゃなあ」と，農夫は言いました。床屋は言いました。「だったら，わしにもう一ヘラー出さなきゃあ。」

二ヘラーで一ペニヒだったのです。

第六百二話　冗談
町を移り住むということ

ある町に一人の床屋が住んでいました。いつも一ペニヒで鬚を剃っていましたが，家業繁盛で全ての掛りを除いても一ペニヒの貯金ができました。たまたま一人の男が，この床屋へ鬚を当たってもらいに来ていて，よその土地の話をして言いました。「その土地のある町では鬚を剃って貰うのに一クロイツアー支払って呉れるんだ。だから床屋の親方は儲かって儲かって仕様がないというわけさ。」床屋はその町に移りました。そして例の話が本当のことだと知りました。客は鬚を剃るのに二クロイツアー呉れました。ところが一週間が経っても，親方には何の儲けもありませんでした。と言いますのは，その町は物価の高いところで，どんな物でも二倍支払わねばならなかったのです。親方は考えました。一ペニヒで鬚を剃っても，諸掛り抜きで一ペニヒの儲けを得るほうが，一クロイツアーで鬚を剃っても手元に何も残らないよりはましだと。そして親方は以前住んでいた所に帰りました。

人生至る所に青山ありと言いますことから，このように自分の境遇を良くしようとして，かえってこれを悪くしてしまうことがあるのです。

第六百三話　冗談
織物の見習い徒弟が二匹の針鼠を見つけたこと

織物職人たちは針鼠に追いまわされます[1]。ある時，一人の職人見習いがある親方を尋ねてきて，この人の手元で働きたいと思いました。この親方は一匹の針鼠を持っていました。徒弟は言いました。「親方，私を働かせてやろうと思うのでしたら，この動物を家から片付けて下さい。」この親方はそうしませんでした。徒弟は遍歴を重ね，別の町にやって来ました。そこで同職の親方が二匹の針鼠を持っていました。徒弟はさらに遍歴を続け，ある親方の所に来ました。この人は三匹の針鼠を持っていました。徒弟はさらに遍歴して，ある親方の所に来ました。この人は四匹の針鼠を持っていました。ここで徒弟は考えました。「最初の親方の所に帰ろう。あの人は一匹しか針鼠を持っていなかったっけ。」

第六百四話　冗談
石をかたわらに投げた男のこと

クサントゥスは下僕のエソープスに命じ，「沐浴場に行って，湯を浴びている人が大勢かどうか見てきなさい。もし少ないようなら，私も体を洗おうと思います」と，言いました。四百人あまりが入浴するような沐浴場が数多あったのです。下僕は様子を見た後，邸に戻りご主人に申しました。「一人よりほか沐浴場には人間はおりません。」ご主人は衣服を脱ぎ沐浴しようとしました。彼が近付いて行くと，沐浴場は男やら女やら，人々で満ち溢れていました。ご主人はエソープスに言いました。「この悪戯者め，あれで一人だというのか。あそこには三百人ほどの人間が居ったぞ。」エソー

1　古代ローマ人にとって，針鼠は羊毛の布地を毛羽立てるため，また羊毛を梳くために役立てられたといわれる。そのため当時，針鼠は貴重な交易品であった。このような事実は本書の書かれた時代にまで伝わっていたのであろうか。針鼠を沢山持っているという事は，それだけ仕事も多忙であったという事であろう。

プスは申しました。「あそこで人間と申す者はたったの一人きりでございました。石が一つ，転がっていたのをご覧になられましたか。石は道に転がっておりました。人々は皆その石につまずきましたが，誰もその石を道から片付けませんでした。やったのは一人でした。その人が人間だと私は思いました。他の人々を人間だとは思いませんでした。」

人は沢山います。しかし，人間らしく生きている人は少ないのです。Quia quodam modo omne peccatum mortale est contra rationalem naturam hominis.（なぜならば，人間の理性的な本性に反するあらゆる罪は，何らかの意味で大罪であるからです。）

第六百五話　冗談

エソープスが一粒の扁豆を煮たこと

クサントゥスはその下僕のエソープスに言いました。「ひとつ扁豆を火に掛けてもらおうかね。」エソープスはたった一粒だけ扁豆を水の入った鍋に仕掛けました。食事の時になって，扁豆は煮えたかと主人はたずねました。下僕は言いました。「見て参ります。」そして扁豆を匙に乗せて主人のところに持ってきました。主人は豆に触れてみて，指で潰して言いました。「下ろしてもよいぞ。」エソープスはスープをもりつけました。主人は匙で豆を探りましたが，豆は一粒も入っていませんでした。それで下僕に聞きました。「おまえは豆をどこに入れたのだ。」エソープスは申しました。「あなたが匙の上でお潰しになられました。」「では，おまえはたったの一粒しか豆を入れなかったのか」とご主人。「はい，あなたは私に，ひとつ扁豆を火に掛けよとご命令になりました。で，私はそのように実行いたしました。もしあなたが多くの扁豆を火に掛けよとおっしゃっていましたら，私も沢山の豆を火に掛けておりましたでしょうに。」

このように，何を命ぜられたか，またどのように命ぜられたかはともかくとして，命令を一生懸命に実行する人は沢山おりますが，命ぜられたとおりに実行すれば良いと言うわけでもありません。命令した人の意向を汲んで事を運ぶべきなのであります。このようにかけ違った奇妙な話は，命じられたままを実行したオイレンシュピーゲルの話の中にも見いだされるのであります。

第六百六話　冗談
一羽の鳥が天を持ち上げていること

聖マルティン鳥[1]という名の鳥がいます。ある時，仰向けに寝て，天に向かって両足を伸ばし，足を引っ込めようとしませんでした。ほかの鳥がそこへ来て言いました。「何だってそんなふうに寝てるんだ。なぜ足を引っ込めないんだ。」その鳥は言いました。「両足で天を持ち上げているんだ。足を引っ込めれば，天が落ちて来る。」長い間そうやって寝ていると，樫の木から一枚の葉が落ちて来ました。その鳥はびっくり仰天して飛んで行ってしまいましたが，それでも天が鳥の上に落ちることはありませんでした。

このように，自分たちがいなければ，人々は暮らして行けないと思っている人が大ぜいおります。そうだ，とこの人たちは言います，自分が役目を退いたら，事情は一変して，前よりだらしなくなるだろう，と。そして，この人たちが役目を退いても，それでも人々は暮らして行くのです。

第六百七話　冗談
二人の学生が二つの袋を持つこと

仲間同士の二人の学生がおりました。歌い歩いてパンを貰い，同じ袋を持っていました。そして，晩になると，一方の学生はいつも袋をパンで一杯にして持ち帰り，もう一方の学生の袋は空っぽでした。その学生は相手に言いました。「きみは袋を一杯にして持ち帰り，おれの袋は空っぽだというのは，どうしてだい。」相手は言いました。「きみは大きな貰い物だけをほしがる，白パン丸のままとかね。だが，おれは，きみが馬鹿にする小さなかけらや屑を貰う。だからおれの袋は一杯になるのさ。」

このように，学校で学生たちもそうですが，説教で高尚な事だけを聞きたがる学生や人間が大ぜいいて，些細な事を軽蔑します。だからこの人々は決して学のある人にはならない，羽根もないのに飛ぼうとしているのです。

1　原語 Sant Martinsfogel。Grimm の DWb. によれば falco cyaneus（あおたか）。聖マルティン祭の頃飛来する小さいたかの一種という。

第六百八話　冗談
多くの本があっても説教師になれないこと

ある時，一人の男が言いました。「世俗の司祭が修道士と同じように上手に説教することができないのは，どうしてだろう。修道士と同じように多くの本を持っているのに。」もう一人の男が答えました。「建築用材がたくさんあれば，良い大工になれるというのなら，イギリス国王は，イギリスで一番良い大工ということになる。なにしろ一番多くの建築用材を持っているからな。ところが，そうはいかない。」こういうわけで，多くの本を持っていても，学のある人になれはしない，しかし本を利用し読むことによって，学のある人になれるのです。

第六百九話　冗談
悪魔が柳の枝でズボンを繕うこと

ある時，悪魔が座って，普通に下穿きとか股引きとか言われているズボンを柳の枝で繕っていました。そこへ一人の若者が通りかかり，それを見て言いました。「やあ，悪魔の旦那，何をしてるんだい。その継ぎ方は不細工だね，みっともないよ。」悪魔は言いました。「見ばえは良くないが，丈夫だぜ。」

このように，私たちの話では多くの美しい，賢い言い方や言葉ではなく，力強い，真実の言葉を捜し，本題に役立つことを話さねばならないのです。ダビデが欲しているのは，神が自分の口の前に壁を造るのではなくて，戸を造ることです。Psal. 140. Ostium circumstancie labiis meis.（詩編第百四十章「私の唇を取り囲んでいる戸を。」）[1] 戸は必要に応じて，開けたり閉じたりする。そのように，口も，適当な時，適当な場所で開けたり閉じたりする，つまり話したり黙っていたりせねばならないのです。

---

1 「詩編」第140編にこの意味の箇所はない。第141編，3に「主よ，わたしの口に見張りを置き，唇の戸を守ってください」とある。

第六百十話　冗談

Sacerdos et pellifex et calceorum etc.（司祭と毛皮職人と靴職人など）

一人の司教がおりました。三人の職人を雇っていて，その一人は毛皮職人，もう一人は靴職人，三人目はパン職人でした。司教は，この三人が助言する事だけを行なって，お抱えの博士たちが助言する事は意に介しませんでした。たまたま，一人の司祭が正気を失い，色々と奇矯な振舞いをして，誰にでもいたずらをしたり，何か言ったりすることができました。このことが司教の耳に入ると，司教はその男に会い，その奇矯な言葉を聞きたくなりました。男が司教の前へ来て，色々おかしなことをした後で，司教は何か歌ってくれと言いました。男は歌い始めました。「Sacerdos et pellifex et calceorum artifex, pistor bone in populo, sic placuisti Domino.（司祭と毛皮職人と靴職人，民衆の中の良いパン職人，これらは主人のお気に召した。）」司教は，「気違いと子供と酔っ払いは真実を言う」という諺を思い出し，こんな歌は聞きたくなかったけれど，それでも聞いてしまったのです。

第六百十一話　冗談

学生が三つの物を持つこと

一人の貧しい学生が一切れのパンを求めて，ある金持ちの市民の家の前で歌を歌いました。その市民は，どこの生まれか，と尋ねました。学生は言いました。「ザクセンのブレーメン生まれです。」市民は言いました。「名前は。」学生は言いました。「ニコラウス。」市民は言いました。「お前は三つの物を身につけているが，そんなものを持っていては何も与えるわけにはいかん。一つしか持っていなくても，何も与えないがな。まず第一に，お前は片目しかない。アリストテレスは言っている，『Eum nota, quem natura notavit.（自然が印を付けた人々に気をつけよ。）』と。二番目に，お前はブレーメン生まれだ。[1] この町生まれで良い子供たちはめったにいない。いくつかの町についてももっと色々のことが言われているようにな。

1　ブレーメン人は悪評高かったという。

三番目に，お前の名はニコラウスだ。[1] この名前の者がうまく行くことはめったにない。だから，さっさと行ってくれ。お前には何もやらない。」

第六百十二話　冗談
三人の乞食は金持ちであること

ある時，人々が乗合馬車に乗って出かけて，貧しい人々に施しを与えました。すると，馬車に乗っていた一人の男は，その日に施しを与えませんでした。ほかの人々は，なぜあなたも施しを与えないのか，と言いました。男は言いました。「私が何も与えない乞食が三種類ある。この連中は私より金持ちだ。乞食が馬に乗ったり，女房を持ったり，犬を飼ったりしていれば，みんな金持ちだ。私には馬も女房も犬もいないからな。」

第六百十三話　まじめ
料理見習いの若者トロイラルドゥスのこと

ある時，一人の金持ちの男が臨終の床に横たわっていました。非常にけちな男で，財産のことでとても悩み心配していました。男は溜息をついて言いました。「ああ，誰のためにおれはこの財産を集めたというのか。これを手に入れるのは誰だろう。」すると，「トロイラルドゥスが手に入れるだろう」と言う声が聞こえました。トロイラルドゥスというのは料理見習いの若者でした。男の妻はこの若者を夫に迎え，若者が財産を手に入れました。若者は前に妻と戯れていたのです。

しばしば害を及ぼすのは，家にいる連中であって，路地に立って髪を縮らせ，夜になると，家の前で歌を歌って女のご機嫌をとる連中ではありません。というのは，火事になると，水がなければ，糞尿で消すのです。[2]

1　Nicolaus. カトリック聖職者の独身制に反対する異端ニコライ宗の創始者で，この名前は忌み嫌われているという。

2　Wann es brennt, so löscht man mit Mist, hat man kein Wasser. という諺がある。なおこの話については第209話参照。

第六百十四話　まじめ
門番に五十叩きの刑が与えられたこと

ある時一人の百姓が，素晴らしい梨を皿に載せてやって来て，それを領主に贈ろうとしました。領主は梨が大好物だったのです。門番は百姓に，領主から頂く物の半分を俺にくれるのでなければ，中へ入れてやらないと言いました。百姓はその事を門番に約束しました。さて百姓が領主の前に来ると，丁重に迎えられました。領主は言いました。「大儀，そちに何を贈ろうかな。」百姓は答えて言いました。「背中に五十叩きの刑を頂きとうございます。」領主は言いました。「何故だ。」そこで百姓は領主に，自分がどのような取り扱いを受けたか話しました。こうして門番が呼び入れられ，しっかりと二十五叩きの刑が与えられましたが，百姓は刑に処せられることはありませんでした。

第六百十五話　冗談
二匹の犬が聖水へ放尿したこと

ある時一人の名士が，食事を終えて教会へやって来ました。そこに一人の男の子が立っていました。その子はその男の代子で，聖水盤の中へ放尿していました。男はその子供に言いました。「どうしてお前はそんな事をするのだ。そんな事をしてはいけないよ。」子供は驚いて，言い訳をしました。「最初に二匹の犬が聖水盤の中におしっこをしました。それで僕もそれを真似たのです。」

第六百十六話　冗談
卵白についての夢占いをした男のこと

ある男が，夢占いが出来ると自称する男の所へやって来て，その男に言いました。「私は自分が眠っているベッドの下に，卵がぶら下がっている夢を見ました。」夢占いの男は言いました。「お前が手に入れる物を俺に分けてくれるのなら，お前のために夢占いをしてやろう。」男はそれで結構だと言いました。夢占いの男は言いました。「ベッドの下を掘ってみろ。そうすれば宝物が見つかるだろう。」男はその通り実行し，銀の板が見つかりまし

た。銀の板が組み合わされ，クローネ金貨が一杯詰っていました。男は喜んでそれを開け，その板の一部を切り取り，それを夢占いの男に贈りました。夢占いの男は言いました。「あの男はわしに卵白の一部を贈ってくれたが，卵黄からは何も贈ってくれてはいないのだ。」

フランシスコ・ペトラルカがこの話を書いています。

第六百十七話　まじめ
博士が司教の所へ行くのを望まなかったこと

ある時パリで，一人の司教がある博士の家の前にやって来て，博士の所へ行こうと思いました。司教は中へ招じ入れられました。博士に，司教が来てあなたに会いたがっていると告げられました。博士は，お待ち頂きたい，私は司教さまよりもっと偉いお方と話がありますから，と司教に伝えさせました。博士には七回の時禱のお勤めがあるのです。司教はそのことで博士を賞賛しました。しかし司教も褒められねばならなかったのです。もし司教が軽率な人間だったら，司教はすぐに博士の所へ行ったでしょうから。

第六百十八話　冗談
娘が司祭を殴ったこと

ある博士が自分の身に起こったこんな例を書いています。ブラバント地方のブリュッセルに一人の娘がいました。とても美しい娘でした。その娘が泣きじゃくりながら博士のところにやって来て言いました。「博士さま，私は困っています。助言をお願いします。ある司祭が私にキスをしようとしました。それで私はその司祭の顔を殴り，司祭の鼻と口から血が出ました。他の司祭や他の人々は私に，あなたはローマへ行かねばならない，さもないと免罪されないと言うのです。」博士は笑わずにはいられませんでしたが，真面目な顔をして言いました。「ローマへ行かなければいけません。」すると娘は，一層激しく泣き始めました。暫くして博士は言いました。「お嬢さん，私はあなたをからかいました。手を挙げて，私があなたに命ずる通りに行うと誓いなさい。」娘は博士に誓いました。博士は言いました。「あなたが行なった誓いにかけて，免罪は必要ありません。あなたは破

門を受けてはいないのですから。誰かが再びやって来て，その男がどんなに高い聖職者に任ぜられていようとも，その男があなたの純潔に対して不当な要求をするならば，その男を堂々と殴り掻きむしってやりなさい。生命と同じ様に純潔を守るべきですから。」娘も，そこにいた人たちも皆笑い始めました。こうして悩みは喜びに変わりました。

第六百十九話　まじめ
娘が男にふざけたこと

ブラバント地方に，騎士の娘がいました。その娘は父方の叔父の妻に仕えており，父親の死後も彼女の侍女にとどまり，男のからかいを快く思いませんでした。たまたまその娘が菓子を焼くことになりました。そこで娘は粉をこねていましたが，娘の傍らにはのし棒があり，そこには一人の騎士もいました。騎士は心の中で思いました。「あの娘は両手がふさがっている。娘は抵抗することが出来ないぞ。」そこで娘に抱きつき，キスしようとしました。すると娘は素早くのし棒を掴み，騎士の頭を殴ったので，目が見えなくなり，腫れ上がって瘤が出来ました。騎士は言いました。「ひどい女だ。こんなふうに私を殴らねばならないのか。あなたにふざけようと思っただけなのに。」娘は言いました。「私もふざけただけです。」その娘の名声が広まりました。

ある伯爵夫人に，一人の娘があり，イギリスの王に仕えていました。伯爵夫人は，例の娘が自分の娘を教えるようにと，その娘を自分の娘の所に送りました。数年の後，例の娘は結婚しようとしなかったので，王は素晴らしい贈物と共に娘を再びガリアへ送り返しました。その後娘はオランダの大きな養護院の管理人になり，多くの病人に奉仕し，礼拝を怠らず年齢を重ねました。大いに賞賛されるべきです，云々。

第六百二十話　冗談
ある男が石の上で眠ったこと

一人の騎士がオランダのある修道院の院長の所へやって来て，修道院長に言いました。「院長殿，あなたの教会の私の席の傍の柱の所に，石が一個あります。その石は柱の前に突き出しています。私にその石をお売りいた

だきたい。そうすればあなたの望まれる物を代わりに差し上げましょう。」修道院長は言いました。「あなたは，その石をどうなさるお積もりか。」騎士は言いました。「教会でと同じ様に，家でもその上でよく眠れるかどうか，わが家のベッドにそれを枕代わりに置こうと思うんです。説教を聴いたりお祈りを捧げる時には，その石の上に頭を載せるとすぐに眠ってしまうのです。」修道院長は言いました。「それは石のせいではなく，悪魔の仕業です。あなたが聖書に耳を傾けたり，熱心にお祈りをしないようにと，悪魔があなたを眠らせるのです。」

別の騎士が言いました。「教会の腰掛は，わが家のどの羽毛のベッドや枕よりずっと柔らかです。その上で眠る方がずっと良いのです。」

第六百二十一話　冗談
復活祭のろうそくを清めた男のこと

モンテカッシノに修道院があり，そこには驚くほど甘い声を持った僧がいました。復活祭の夜に，復活祭のろうそくを清める際，彼はハレルヤを歌いました。彼自身にとっても，他の人にとっても満足のいくものでした。ところが儀式が終わるとろうそくがなくなってしまいました。どこへ行ってしまったのか，今日までわかっていません。しかしこれは悪霊が持ち去ったのだと考えられています。というのも良い天使であれば持ち去ることはなかったでしょうから。ろうそくを清めた者の行状が僧にふさわしくなかったのです。

第六百二十二話　冗談
ネロが杯を割ったこと

かつてある王様にガラスでできた非常に美しい杯が献上されました。王様はこれが気に入り，たっぷり眺めた後，棒を取り出して杯をみな割ってしまいました。彼が言うには，「他の者がこわして私を怒らせ，残虐な仕打ちに至るよりは，私がこわした方がよい」とのことです。この王様は，皇帝ネロよりもましな考え方をしています。ネロは，杯には目がありませんでした。彼は誰にも杯の楽しみを与えまいとして，死ぬ間際になってそれらをみな割ってしまいました。誰にも杯を与えたくなかったのです。フラ

ンシスコ・ペトラルカがこの話を書いています。

第六百二十三話　冗談
皇帝フリードリヒがベネチア製の食器をこわしたこと

皇帝フリードリヒ三世がかつてベネチアへやってきたとき，ベネチアの人たちはガラス製の見事な食器を彼に献上しました。皇帝はそれをしげしげと眺め，食器に精通しているかのようにそれを大いに褒めたたえましたが，そのとき食器を手から落として割ってしまいました。居合わせたベネチアのお偉方たちは，ああもったいない云々と言いました。すると皇帝は言いました。「これが銀や金でできていたら，砕けたかけらでも価値があったのだが。」

第六百二十四話　まじめ
ゲッピンゲンが焼けたこと

シュヴァーベン地方にゲッピンゲンという町があり，そこには炭酸泉が出ます。この町にある未婚で年老いた敬けんな婦人が住んでいて，週に何度も市民たちのところで昼食を食べさせてもらっていました。彼女はいつも「まもなく町に大きな罰が下されるでしょう」と言っていました。長い間この話をしていたので，お偉方たちはどんな罰なのかと尋ねました。「火事です」と女は言いました。「どの家から火が出るのかね」という問いに対して，女は「某市民の家です」と答えました。その善良で敬けんな男は町を出て，ある庭園に小さな小屋を立て，そこに住みました。お偉方たちは彼に，家に戻りなさい，あなたが悪意で町に火をつけることはないということはよく知っているから，と言いました。しかしほどなくしてその家から火が出て，ほとんど町全体を焼き尽くしてしまいました。

ここでの教訓は，このような素朴で貧しくて敬けんな人たちの忠告は馬鹿にできないということです。というのも，主が福音書で言われているように，地位のある人や立派な学者よりも，そのような人にはるかに多く，神が啓示するからです。Mathei 11. Confite or tibi, pater celi et terre etc.（マタイによる福音書　第十一章　天と地の父よ，私はあなたを褒めたたえます，云々。）

第六百二十五話　まじめ
金持ちが貧乏人に損害を与えたこと

セネカがquadam proclamatione（ある人の叫び）の中で，貧乏人の隣に住んでいたある金持ちのことを書いています。その貧乏人のところには一本の木があって，そのために馬車や荷車で門から中に入れず，金持ちの男は困っていました。金持ちは彼に，木を切り倒して自分に売ってくれ，金はたっぷり払うからと頼みました。貧しい男は偉そうな物言いでけんもほろろに答え，木を切ろうとしませんでした。そこで金持ちの男は夜になって木を焼き払ってしまいました。木から火の粉が貧しい男の家に飛び，家も家財道具も丸焼けになりました。

貧しい男は損害を受けたとして彼を法廷に訴えました。金持ちは次のように答えました。「あなたの言うとおりだ。わしは町の条例に従って賠償しよう。条例には次のように書いてある。意図的に他人に損害を与えた場合は，その四倍を償うべし。しかし意に反して損害を与えた場合はその分を償うべし。今回の場合もこれが当てはまり，自分はその木を意図的に焼き払ったので，その分は四倍支払おう。しかし家が焼けたことは気の毒ではあるが，これは自分が意図したわけではなく，意に反して起きてしまったのだ。この損害はその分だけ支払いたい。」こうして審理が始まり，裁判官たちは，この条項どおりにすべきだと判決し，その通りになりました。

これを宗教的に解釈すれば，金持ちは主なる神，貧乏人は人間，そして木は人間の意志になります。木は多くの人間が天国に行くのを妨げ，神に害を与え，さらに神の栄光をじゃまします。というのも，素直なときでなければ，その人間には神に対する信心も神の栄光も現れないからです。魂が永遠の火の中に投げ込まれるとき，神はその木を燃やして，四倍にして埋め合わせをします。地獄で燃えているのは強情な心だけです。「強情な心は捨て去りなさい。そうすればもはや地獄はなくなる」と，聖ベルナールは述べています。肉体を意味する家も，われわれが復活する最後の審判の日には焼かれてしまうのです。云々。

第六百二十六話　まじめ
キリストが幼子の姿で現れたこと

ある本に書いてあることですが，一人の信心深いやもめが，降臨節[1]のあいだずっと主キリストに，幼子の姿で現れてほしい，とお頼みしていました。クリスマスの当日，盛式ミサがすんで，皆が帰宅したあと，やもめは教会に残って，祈り続けました。そこへ可愛い子供が一人やって来て，やもめのひざに駆け寄りました。やもめはその子と親しく言葉を交わし，口づけし，抱きあげ，楽しいひとときを過ごしました。やもめはその子に尋ねました。「坊やもお祈りできるかしら。」子供は言いました。「ええ，できます。」やもめは言いました。「それでは，アヴェ・マリアと祈ってごらん。」その子は言われたとおりにしました。「恵まれたマリア様に幸せがありますように。主があなたとともにおられます。あなたは女のなかで祝福された方です。胎内のお子さま主イエス・キリストも祝福されています。[2]私自身が主イエス・キリストなのです。」この言葉とともにその子の姿は消え，やもめの心には言い表しえない甘美にして，惜しみなく奪う，充たされない愛の気持ちが残りました。やもめは大声で叫び始めました。「もう一度私のところへ来ておくれ，ああ，可愛いやさしい坊や，もう一度来ておくれ。」やもめは凡そ三十日間，どこにいても，どこへ行っても，上の言葉を言い続けました。三十日たつと，その子供が再び姿を現して，やもめに言いました。「あなたは私を探していらっしゃる。いま私はあなたをお連れしにここへ来ました，あなたが永遠に私のそばに居られるように。」その後まもなくやもめは息をひきとり，天国へと旅立ちました。

1　クリスマス直前の四つの日曜日を含む約四週間。

2　ルカによる福音書1.28.「天使は，彼女のところに来て言った。『おめでとう，恵まれた方。主があなたと共におられる』」　ルカによる福音書1.42.「……声高らかに言った。『あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。……』」

第六百二十七話　冗談
神の愛をさがし求めた男のこと

あるまっとうな男が，この世で神の愛をさがし求めようと思い，旅に出てある町に来ました。そこの城壁にはいくつもの首枷がかかっていました。男は，あれはどうするものか，と尋ねました。誰かが他人を罵ったり，侮辱したり，それに類することをしたとき，その人はあのなかにはめられて辱めを受けるのだ，というのが返事でした。男は，あの首枷はよく使われるのか，と尋ねました。あのなかに二人か三人はめられていない週はない，というのが返事でした。男は言いました。「ここに落ち着くのはよそう。ここには神の愛が少ないようだ。」その後男は別の町へやって来ました。そこでは絞首台や車刑用の車輪が目につきました。それらが何のために使われるかを知ると，男はそこにも腰を落ち着けようとは思いませんでした。

男がもっと遠くの町へやって来ますと，入口を開け放して，なかにベンチをならべた家があり，その家の入口は狭く，真ん中には人が座る高い椅子がおいてありました。例のまっとうな男は，あれはどういう家か，と一市民に尋ねました。その市民は，あれは裁判所だ，と答えました。男は，裁判はよく開かれるのか，と尋ねました。市民は言いました。「いや，凡そ年に一回だ，しかし判事は月に一回やって来て，一時間待機することになっている。誰か他の人を訴えたい人が来れば，判事が二人を裁く。しかし，裁判が開かれるのはごくまれなので，入口にもベンチにも蜘蛛の巣がいっぱいはっている。」そこで例のまっとうな男は言いました。「ここには神の愛がある。」そしてそこに腰を落ち着けました。

しかしいまでは毎日三回か四回の裁判を開く必要があり，それでもすべての裁きが決着するとは限らないでしょう。というのは，神の愛が死んだからです。

第六百二十八話　冗談
月の光をつたって降りた男のこと

ある時ひとりの泥棒が屋根にのぼり，盗みのため家のなかに入ろうとし

ていました。家のなかの亭主はそれを察知し，泥棒にもよく聞こえるように大きな声で女房に言いました。「おい，わしは若い頃ある家に泥棒にはいろうとしたことがあったが，その時わしは天窓からなかへ入り，x fixum dabit x（月の光よ，固まれ）という呪文を唱えたんだ。すると家のなかにいた人々は全員眠ってしまった。そこでわしは月の光をつたって，家のなかに降りていった。月の光が私を支えてくれた。そしてそこにある物を手あたり次第にいただいたんだ。」屋根のうえの泥棒は考えました。「俺も呪文を唱えてみよう。」そして呪文を唱えました。亭主は大きな，女房は小さないびきをかきはじめましたが，本当は二人とも眠ってはいませんでした。泥棒は二人が眠っていると思い，月の光をつたって家のなかへはいろうとして，落ちて足の骨を折り，絞首刑にされました。

それ故，何人も幸運を当てにしてはいけません。そういう人は結局失敗します。

第六百二十九話　冗談
自分の容体をはっきり言わなかった病人のこと

ある病人が医者を迎えにやり，自分のところへ来てほしいと，伝えさせました。医者が病人のところへ来ますと，病人は自分の容体を次のように訴えました。「先生，何処かはよく覚えていないのですが，ある所へ行ってきましたら，どうしてかはよくわからないのですが，具合がわるくなって，その場所は正確には言えないのですが，体のあちこちが痛むんです。」医者が言いました。「あなた，薬局へ使いをやって，何でもいいからとにかく薬を買って，用法はかまわないからとにかくその薬を飲みなさい。そうすれば，いずれよくなるでしょう。」

それ故，阿呆呼ばわりされたくなければ，聴罪司祭，医者，弁護士には要点をはっきり言わねばなりません。

第六百三十話　冗談
驢馬にのった女のこと

フランシスコ・ペトラルカが書いている話ですが，ある若い女が驢馬にのって，森を通って行きました。女は道が二つにわかれる辻にやって来ま

した。女は驢馬の手綱をひいて，一方の道を行くように指示しました。驢馬はその道を行こうとせず，別の道を行こうとしました。女は自分が言った道を行くよう指示し続けましたが，驢馬は自分の道を行こうとしました。こうして驢馬は口には出さずに女に警告していたのです，女がその道を行ってはいけない，その道には追剝，辻斬りがいるからと。しかし女はその警告に気付かず，自分のいう道をどうしても行こうとしました。こうして驢馬と争っているうちに，追剝，辻斬りがやって来ました。女は捕らえられ，乱暴され，持ち物を奪われました。女が驢馬の言うことを聞いて，別の道を行っておれば，災難には会わなかったでしょう。

同様に，神様は煩わしいこと，例えば贖罪によって私たちに一つの道を示すという気配りをしておられるのです，その道を通っていけば私たちは何ら不幸な目にあわず，恐ろしい追剝ぎに襲われることもないのです。しかし私たちは一旦こうと思ったらそれを改めず，間違った道を行こうとします。その結果困ったことになっても，罪は私たちにあります。三人の聖なる王は，per aliam viam reversi sunt in regionem suam. Mathei 2 etc.（別の道で自分の国へ引き返しました）[1]。

第八十八章　雑編　第二部

第六百三十一話　まじめ
一人の泥棒が他の泥棒から盗んだこと

山うずら（Rebhun）という鳥は泥棒鳥（Raubhun）と言われた様に，その名を rauben（強奪する）から得ています。Perdix a perdere, perdit ova sua, quod rapit aliena.（山うずらは，失うに由来する。他の鳥の卵を奪うために自分の卵を失うからだ。）山うずらは他のうずらの卵を盗みます。この様にしてある時一羽の山うずらが，その卵を失い，あちらこちらへ飛んで卵を探しました。その山うずらは卵と泥棒を見付けて，泥棒を裁

1　マタイによる福音書 2.12.「ところが，『ヘロデのところへ帰るな』と夢でお告げがあったので，（学者たちは）別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。」

判官の鷲に訴えました。裁判官は泥棒を法廷に呼びだし，山うずらはこの泥棒を告訴しました。この泥棒は，そんなことはしていません，私は何も知りませんと激しく否認しました。そこで山うずらはこう申しました。「裁判官様，あの泥棒に縄をかけ，十字架に吊し拷問にかけて下さい。本当のことを言うでしょう。」裁判官は，「泥棒が真実を話すように，拷問にかけよと言うのなら，わしが正しい判決を下すために，お前はその泥棒がお前の卵を盗んだという確証をあげて証言しなければならぬ。そうでなければ，わしはお前等二人とも拷問にかける」と言いました。山うずらは証言できませんでした。裁判官はその泥棒と原告の双方を捕らえさせて，拷問にかけました。泥棒は盗みを自白し，例の山うずらも自分が行った盗みと他の悪事を自白しました。裁判官は両方共を絞首刑に処すべしという判決を下しました。事はその通りに行われたのです。

だから，すねに傷持つ者は，誰をも訴えてはならないとは，カトー[1]が言ってる通りです。「Que culpare soles, ea tu ne feceris ipse, turpe est.（汝が非難するを常とすることを，汝自らなすなかれ，そは恥なり。）」然しながら現在は，大泥棒が小泥棒に判決を下しています。ある者が参事会員であり同時に泥棒であって，泥棒に死刑の判決を下すのに手を貸すならば，その者は前もって自分の罪と盗みについて痛悔をなすべきです。そうすればその者自身が，有罪であるという判決文の中で，新しい罪業を犯すことにはならないのです。

第六百三十二話　冗談
ある男，羊を投げ捨てたこと

自分たちに向かって言われることを，軽々しく信ずる人たちがかなり多くいるものです。こういう人々は，一匹の羊を肩に担いで，市場へ行こうとしていた百姓に似ています。一人の男がいて，こう言いました。「きっとわしが，あの百姓を説き伏せて，担いでいる羊を投げ出させる。それからわし等がその羊を頂くとしよう。」そして三人の仲間を互いに遠く隔てて

1　Catho（Marcus Porcius Cato），古代ローマの政治家，監察官（BC 234–149）。

立たせておき，その三人のおのおのが，「お前さん，その犬をいくらで売るんだい」と，言わせることにしました。例の百姓が近づいて最初の男の処にやって来ました。その男が言いました。「お百姓さん，その犬をいくらで売るんですかい。」百姓は言いました。「犬なんかじゃない。これは羊ですぜ。」「これがお前さんには羊に見えるんですかい」と，その男は言いました。百姓は道路上の次の男の処へやって来ました。その男も同じ様に言い，第三番目の男も最初の男と同様でした。この百姓は担いでいた羊を放り投げ，「これは犬なのか，わしは羊だと見違えていた」と言いました。百姓が立ち去った時，三人は羊を手に入れて，それを平らげました。

第六百三十三話　冗談
一羽のかささぎが他のかささぎを騙したこと

一羽のかささぎを飼っていた鳥刺しがいました。そのかささぎは人によく馴れて人語を話すことができました。このかささぎが野生のかささぎがいる野原へ飛んで行きました。野生のかささぎたちが飛んで来たかささぎに，「誰が君に，人間のように喋ることを教えたのか」と聞きました。飼馴らされた鳥が言いました。「わしには先生がいてね，しゃべることを教えてくれたんだ。もし君たちがわしと一緒に，その先生の処へ翔んで行くなら，君たちにもしゃべることを教えてくれるだろうし，その上食事も少しばかりのお金を払えば出して貰えるだろう。」野生のかささぎたちは，「君の様にしゃべることを僕等にも教えて貰えるように，先生にとりなして呉れ給え。君に立派な贈り物をしよう」と言いました。飼馴らされたかささぎが言いました。「明日，あんたたちに返事を知らせよう。」その鳥は我が家の先生の許へ飛んで，先生に言いました。「明日，先生の網を張って下さい。沢山の鳥を連れてきましょう。」先生はそうしました。

朝になると，そのかささぎは野生のかささぎたちの許へ飛んで，言いました。「先生は君たちに，人間のようにしゃべることを教えて下さるだろう。だから僕と一緒に飛んで行こう。君たちは安全だよ。」かささぎたちが網のある処までやって来た時，例のかささぎは人語で先生と話したので，他の連中にはそれが分かりませんでした。鳥刺しは網を引いて，すべての鳥を捕らえ，何羽かを殺し，若干は売りました。そこで彼らは揃ってこう

言いました。Quorum dicta non captamus, fidem illis nunquam demus.（我々がその言葉を理解しない人に，決して信頼を置いてはいけない。）

第六百三十四話　まじめ
二十日鼠が猫に鈴を付けようとしたこと

相談ごとがあれば，二十日鼠が物笑いの種にされた如く，人の物笑いにならぬように解決がなされるか，子細に吟味すべきです。二十日鼠たちが協議した，その協議の中で，鈴を買い入れ猫の居場所が警告されるように，鈴をぶら下げたらよいという案が出ました。この案は皆の気に入りました。その時一匹の鼠が立ち上がって言いました。「猫に鈴をつける勇気のあるものは誰かいますか。」そんな鼠はいませんでした。だから相談はなんの役にも立ちませんでした。

あるローマの王にこのような風の王がいて，如何ようにしてローマへ行き，如何ようにして皇帝の冠を受けたらよいかと協議しました。諸侯たちはあれこれこの道を通ってなどと，種々相談しました。皆が立ち上がった時，王の道化師が王の許へ行って言いました。「殿，御家来衆の方々は皆，どのようにしてローマへ行くかを殿に助言していますが，どのようにして其処から再び出て来たらよいかを助言しておりません。」

第六百三十五話　まじめ
ポリュクラテスが大変な幸運に恵まれていたこと

Valerius libro sexto（ヴァレリウス[1]の第六書）で，著者はある王のことを書いています。この王はポリュクラテス[2]といい，Policraticon（ポリュクラテスのもの）にものっています。この王は大変な幸運者で，王の始めること全て幸運で終わりました。自分の不運についてはまるで語ることができなくて，王は苦しみを味わってみたいものだと思っておりました。王は一つの黄金の指輪を持っていて，それには高価な宝石がはまっており，

1　Maximus Valerius のこと。1世紀前半のローマの歴史家，その著『著者言行録』は，修辞家の便利な参考書としてもてはやされた。

2　Polycrates, B. C. 6世紀，サモス島の専制君主

指輪は百十五グルデンほどはすると思われました。王は苦しみを味わうべく，指輪を海に投げ込みました。四日後一人の漁師がやってきて，王に一匹の魚を献上しました。魚の腹が開かれて，はらわたが取り出されたとき，王は居合わせておりました。その場で指輪が魚の中にあるのを王は見つけたのです。しかしこの運も王を見放しました。王は別の王の捕虜となり，ある高い山の上で絞首台に吊るされたからです。

このように誰しも運を当てにし過ぎてはなりません。この世はいつも楽園で，前の戸から金を外に投げると，金は後ろの戸から中に飛び込んでくる，などとお前は思っているが，好運は長くは続かず，事態はすぐに変わってしまうものです。「劫罰が罪人の意志通りになるとき以上に確かな印はないものです」と，聖グレゴリウスは言っています。

第六百三十六話　まじめ
デイアナの神殿を燃やした男のこと

我が聖髭親父[1]こと聖ヒエロニムスは，L某という邪教徒のことを批判して，書いています。この男はキリストの母マリアのことを，一生処女であり続けることはなかった，と侮辱しました。これは自分の名前が地上に広まり，自分の死後世の語り草になるためにしたという訳です。

この男はN某という別の邪教徒と同類です。その男はエペソ[2]にあるディアナの神殿を燃やしました。この神殿は，異教徒たちが四百年間にわたって造営に携わり，この世の四つの奇跡の一つでした。男が神殿を燃やしたとき，全ての門は閉じられ，この災害を起こした張本人が誰なのか知ることができないものかと，信徒がみな集まりました。その時，この男が飛び出してきて，俺がしたのだ，と言いました。人々はどうしてそんなことをしたのかこの男に尋ねました。男は言いました。「俺は死にたいのだ。死後俺のことを何か書かざるをえないように，そうしたのだ。」現にそうなりました。

正にそのとき，女神ディアナはどうして自分の家が燃えないように守ら

1　聖ヒエロニムスは 髭を生していたことから，「聖髭親父」が通称となった。
2　エペソ（Ephesos），小アジアの地中海岸にあった古代ギリシャの都市名。

なかったのかと，ある男が尋ねました。すると別の男が，女神はその夜留守だったのだ，女神はオリュンピアス[1]のところにいて，その夜生まれたアレキサンダー大王の誕生を助けていたのさ，と言いました。

第六百三十七話　冗談
三人の妻が首吊り自殺をしたこと。

一人の哲学者がいて，妻を娶っていました。数年後，妻は庭の一本の木で首を吊りました。数年後にはまた妻を娶りました。この女も同じ木で首を吊りました。三人目も同じことをしました。要するに，この哲学者はこの不幸を悲しみ，別の町に親友がいましたので，学者はその友人に手紙を書き，悲しみを訴えました。するとこの友人は返書で慰め，君は愚かな男だ，妻が死んでくれたとなれば幸せなことだ，と言いました。親友は学者に伝えました。「君，私にその木の小枝を三本送ってくれ，私たちも女房たちから解放されるように，一本は私が植え，他の二本は隣の男たちにやりたいと思う。」

「夫に死なれた妻の暮らしを知ってみたいわ」と，言う妻たちもいます。同様に夫たちも言います。だけど最良の縁が後からくるなんてことは，めったにあるものではありません。伴侶がもうこの世にいなくなってみると，伴侶の良さが分かるものです。

第六百三十八話　まじめ
賢者に机を与えよとのこと

ギリシャのアテネで漁師たちは沖に漁にでて，机を網にかけました。この机には，折りたたみ机のように二枚の黄金の天板が付いていました。漁師たちはその机を神殿のアポロ神像の前に運び，黄金の机を誰に渡したらよいか神に尋ねました。最高の賢者に与えよ，とアポロ神は答えました。当時ギリシャ全土には一番の賢者と目された人は七人いました。漁師たちは一番目の人に最高の賢者であるとして，その机を持ってきました。その

1　オリンピアス（Olympias），マケドニア王フィリプス二世の妻，アレキサンダー大王の母。

賢者は机を受け取ろうとせず，別の賢者のところへ持って行くように命じました。二番目の賢者も机を受け取ろうとせず，一番の賢者になろうとする者は誰もいませんでした。そこで漁師たちは机をアポロ神に捧げました。

しかし昨今，愚かさや貪欲故に机を受け取ったであろうような人たちが多くみられます。今では多くの人たちが最高の賢者でありたがるからです。ある時，今世には賢者などはいない，とある人が言いました。それが事実かどうか今は議論しないでおきましょう。賢者はもういないと言いうことになれば，その判断は厳しすぎます。もう誰も賢さを求めなくなるからです。ユダヤ人たちは彼らのところに賢者がいたことを讃えました。その賢者はソロモンでした。ソロモンがどれほど賢かったのか，ソロモンの群れいる女たちが披露してくれています。ソロモンは三百人もの側女と七百人もの妻を抱えていました。さらには偶像崇拝をし，偶像礼拝を自分の祭壇で執り行いました。ローマ人たちは二人の賢者，レリオとカトーを讃えました。私たちには七人の賢人がいる，とギリシャ人たちは言いました。ソクラテスは賢人である，とアポロ神は言いました。けれどもソクラテスはそう呼ばれたいとは思っていませんでした。しかし，今日私たちは昔の人たちより幸せです。なぜでしょうか。賢者が町で羊の群れのように群れ歩いているからです。すると人々は言います。あれはシュトラースブルク，バーゼル，マインツなどの賢者です。この者たちがどれほど賢いかは，姦通や情事や悪習，そして人々が主張したり，誓ったり呪ったりている迷言，さらには時に下されるご立派な判断力が見せてくれます。賢く話し，賢く生き，賢いといわれ，賢くあることはこれとは別のものなのです。もし，賢いと思われるのと同じ数だけ賢者がいれば，この世は現在より良くなっているでしょう。しかし賢者たることは，厳しく困難であり，賢く見せることは，大変たやすいことなのです。

第六百三十九話　冗談

不貞についての一例。不貞を行った男が改心したこと

一人の騎士がいました。この騎士は，あらゆる不貞やふしだらな行いで一杯でしたが，妻は全く信心深い人でした。彼はほとんど毎晩，妻のとこ

ろから起き上がって，娼婦や，家の中の女中のところに出かけて行きましたが，いつも妻に向かって，「厠に行って来る」と言いました。彼が戻って来ると，いつも明かり，水差し，手水鉢，手拭いがチェストの上に置いてありました。ある時彼はこう言いました。「おいお前，私にこういうものを置いておくのはどういう意味だ。」妻は言いました。「旦那様，あなたは厠に行ったと申されます。そういう場所に行きますと，手を洗うものでございます。」さらに言いました。「愛しい旦那様，あなたがどこに行かれ，何をなされるのかよく存じております。どうしてもそれを改めることができず，私に満足なさらないで，女のところへ行かねばならないのでしたら，お願いですから，私にその償いをさせないで下さい。私からあなたの愛情を取り去らないで下さい，私があなたから愛情をなくさないように。私はこのことを少しでも苦にしたり，あなたのことで何一つ申し上げたり致しません。しかし私はおそらく愚かで，賢くない女ですので，事情が変わらなければ，そのことで自分の心を責め苛むでしょう。」この男はそれを聞いて，妻が耐え忍んでいるのを見て取り，言いました。「よし，お前，私はもうそういうことはしない。やってしまったことは許してくれ。」そして心を改めたのでした。

このように善意と良い言葉で，この婦人は夫を不貞から引き離しました。夫に釈明を求めたり，ののしったりしたならば，夫はもっと悪くなったことでしょう。ご婦人のある方々がおやりのように，良い言葉を喉に詰まらせてお出しにならないと，夫は遅く帰って朝早く出かけていくものです。

第六百四十話　まじめ
ぼろ切れを家の前に打ちつけた男のこと

一人の騎士がいました。この人は，馬で出かける時，いつもチョークとぼろ切れを携えておりました。彼は，ある町の貴族の家や館の前に来て，ふしだらな女がいると，ぼろ切れをドアに釘でぶら下げ，その下に，「ここに尻軽女がいる」と書き，さらに自分の名前を書き加えました。しかし信心深い婦人や純潔な女性が館や貴族の家にいるのを知ると，その女性のところへ出かけて褒め称え，その女性に言いました。「神があなたの純潔を認

められますように。生ある限り良い心掛けを持ち続けられるなら，あなたは大いに尊敬されます。」

女性が貴族出身の金持ちで良い身分でなかろうと，信心深い婦人を一緒に座らせ，またふしだらな女も一緒に座らせた昔のように，今でもそうすることがよいことでしょう。それによって人々は，婦人や純潔な女性を刺激して誠実にし，一方のふしだらな女を辱めるのです。彼女たちは，顔が上げられないのです。しかし今は，娼婦のような女に，まじめな婦人にするように敬意を払うのです。そして結婚式でもあると，「まじめでも，まじめでなくても同じだ」と，多くの人々が考えます。村々では，司祭と関係のある女が，まじめな婦人の上位に座ったりします。それがなければ，彼女たちはやって来たりしません。彼女たちはまた，他の女たちよりも十分に贈りものをし，それを楽しんでいるのです。

第六百四十一話　冗談
藁しべと喧嘩をした婦人のこと

フランスの騎士の奥方の話ですが，この女性は，身分の高い立派な方々が沢山おられる前で，ある騎士と喧嘩を始めました。というのは，彼女は喧嘩好きで，その騎士を悪し様にののしったからでした。さんざん悪態を聞いた後で，この騎士は言いました。「奥様，ここの立派な方々の前であなたが言われることは，全く事実ではありません。私はあなたと喧嘩をする気はありません。あなたが結婚している方のために見逃しておきます。」そして地面から一本の藁しべを取り上げ，それを彼女の前に置いて言いました。「この藁と喧嘩をしなさい。私は帰ります。」これによってこの騎士は，彼女にさんざん悪態をついたよりずっと名誉と賞賛を得たのでした。

非常に喧嘩好きの女がいる場合，喧嘩が始ったら，その女から離れるのが一番良いことです。

第六百四十二話　冗談
自分の長靴に脂を塗らせた男のこと

昔，一人のいたずら好きがいましたが，どんな人にでも上手にからかいました。彼はある靴屋に，長靴を持ってやって来て言いました。「親方，こ

の長靴にシュピッケンして（脂を塗って）[1] くれないか。四日経つとまた馬で出かけなければならないんだ。」親方は，「いいよ」と言いました。彼が行ってしまうと，弟子の職人が言いました。「親方，あいつは誰にでも鈴をぶら下げる[2]かもしれん奴ですよ。彼の命令したとおりに，長靴にシュピッケンして（脂身を差し込んで）やりましょう。」親方は言いました。「よし，やってやれ。」そして彼らは，鳥や鶏の肉に脂身を差し込むように，長靴に脂身を差し込みました。

三日後にこの若者がやって来て，長靴に脂を塗ったかどうか尋ねました。親方は出来てるよと言って，それを渡しました。この若者は言いました。「命令された通りにやるとは，結構なことだ。代金はいくらだね。」親方は言いました。「八クロイツァーだよ。」彼はそれを数えて支払い，長靴を持って立ち去りました。彼は路地を半分行くと，また向きを変えて目の前を覆い，窓ガラスを突き破って，頭を部屋の中に突っ込んで言いました。「親方，長靴にシュピッケンした脂は，なんの脂だったんだね。雌豚のかね。雄のかね。」靴屋の親方は腹を立てて言いました。「つべこべぬかすな。おれの家の窓を台無しにしおって。」このいたずら者は言いました。「わしが尋ねているのは，なんの脂かということだ。」こう言って，彼は去って行きました。親方は職人に言いました。「他人に鈴をつけた奴は誰だ。一グルデンでは窓ガラスを修理することはできん。お前はわしに損をさせたんだぞ。」

第六百四十三話　まじめ
父親を恥じた息子のこと

一人の職人がおりましたが，この人には学生としてパリに暮らしているとても美しい息子がありました。貴族たちはこの息子を自分たちのもとへ呼び寄せました。息子は貴族だと自称していました。そして父親に，四十クローネ送ってくれるようにと手紙を書きました。父親は自らパリへやっ

1 『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』第45話にある話であるが，spicken という語には，「靴などに脂を塗る」意味と，後で弟子の職人が言う，「脂の少ない肉に，脂身を差し込む」という意味とがある。

2 「鈴をぶら下げる」とは，ある人を馬鹿にすること。

て来ました。息子に会いたいと思ったからです。そして農夫のような質素な身なりでやって来ました。息子は父を自分の部屋へ連れて行きました。ちょうど食事時でした。そして息子は父に言いました。「お父さん，皆は僕を貴族だと思っているんだ。だから，あんたが僕の父親だなんて言ったら，僕は恥をかくことになる。僕の父親の召使いだと言ってよ。」父親は言いました。「ああ，いいとも。」皆が食事をすることになった時，父親は料理人や召使いたちの場所に座らされました。さて，食事が済むと，息子は父を再び自分の部屋へ連れて行き，言いました。「お父さん，僕に沢山お金を持って来てくれたかい。」父親は言いました。「ああ，十分に持って来たさ。だが，お前には一銭もやるつもりはない。お前はわしが父親だということを恥しがった。だから，わしもお前を息子として恥しく思う。わしはお前に一ペニヒもやらないぞ。では，わしは行く。さらばだ。」

これは全く福音の意にかなうものでした。

第六百四十四話　冗談
桶一杯のミルクを買った男のこと

ひょうきんないたずら者がある町へやって来ました。この男は以前に多くの町でしたように，その町でも自分の事が語り草になるようなことをしでかしてやろうと思いました。さて，金曜日にはいつもミルクが沢山売りに持って来られました。そこで男はミルク市場に洗濯桶を一つ置いておきました。女たちが村々からミルクを持ってやって来ると，男は女たちからミルクを全部買い取り，ミルクを桶の中へ注ぐように言いました。そして一人の記録係をその横に腰掛けさせました。記録係はそれを書き付けました。いたずら者は言いました。「皆さん，私がミルクを十分に手に入れたら，あなたがたにまとめてお支払いするつもりです。」女たちは家に駆け戻り，ミルクに水を注ぎ込んで，それを運んで来て書き付けてもらいました。桶が一杯になると，いたずら者は言いました。「皆さん，金額が余りにも高くなってしまいました。私は今，皆さんにミルクの代金を支払えるほど金を持ち合わせておりません。一週間待ってください。次の市の日にきちっとお支払いします。」女たちは待とうとはせず，支払いをしてもらいたがりました。そこでいたずら者は，まるで怒ったようなふりをして言いました。

「あんたたちが掛けで売りたくないんだったら，もう行ってくれ。自分たちのミルクをまた持って行ってくれ。」そしていたずら者は行ってしまいました。

そこで女たちは皆ミルクの上におおいかぶさり，各々が自分のミルクを取り，そのことで意見がまとまらず，お互いにミルク壺を頭にぶつけ合いました。それで沢山のミルクがこぼれました。まるでミルクの雨が降ったかのようでした。お偉方たちやそこに居あわせた人たちは皆，そのいたずらを笑いました。

第六百四十五話　まじめ
アルグスが百個の目を持っていたこと

ある時二人の狩人がおりました。一人はアルグス［est fabula（神話伝説ですが）］といい，百個の目を持っていたと書かれています。もう一人は左の目しかありませんでした。二人の狩人は一頭の鹿を追っていました。鹿はある農夫の納屋へやって来て言いました。「お百姓さん，私を助けて下さい。二人の狩人から私をかくまって下さい。」農夫は言いました。「私はお前をポルフェムスからはうまく守ってやれると思うが，アルグスからは無理だろうな。」そして鹿の上に藁を投げかけました。ポリフェムスは鹿を見つけませんでした。しかしアルグスは鹿をうまく見つけて，突き殺しました。

宗教的にも同様です。神はアルグスです。そして百個以上の目をお持ちです。ポリフェムスは人間です。ある時一人の人間が神と裁判官に追跡され，追われるということが起こったとします。裁判官が世俗の人であろうと，宗教上の裁判官であろうと，あなたは貢ぎ物や贈物を使って，偽りの返答でうまく隠れることができます。というのは，その裁判官には目が一つしかないからです。つまり彼はただ肉体的なもののみを認め，しかも全てがわかるわけではないのです。彼には左目しかないのです。財布と世俗の財以外には何も見えません。右目が欠けているのです。つまり，彼は宗教的なものと永遠のものを何も尊重しないのです。外整えば内整うと思っているのでしょう。でも，あなたは神から逃れることはできませんよ。

第六百四十六話　冗談
十二人の盲人が十二グルデン分飲み食いしたこと

ある時，十二人の盲人が連れだってニュルンベルクからやって来ました。というのは，聖なる御公現の祝日には，そこで盲人たちにお金が与えられるからです。その時，ニュルンベルクへ行こうとしていた一人の騎士が盲人たちに出会って，彼らに言いました。「盲人の皆さん，あなた方はこの悪天候にどこから来られたのですか。」盲人たちは言いました。「ああ，領主様だかどなた様だか存じませんが，私たちはあなたが馬に乗っておられるのは聞いてわかります。私たちはニュルンベルクから来ました。そして私たちが実際にされたことは，言われていたこととは違うと話していたところです。天気が悪く，雪が降って，風も吹いて，おまけに寒いんです。私たち貧しい者たちはどこへも行けません。」騎士は言いました。「それではそこの隣村へ行きなさい。そんなに遠くはありませんよ。そして兎亭という宿の場所を尋ねなさい。この十二グルデンを受け取って，そこで飲み食いしなさい。そうしている間に天候も良くなるでしょう。そして私のためにも神様に祈って下さい。」

盲人たちは騎士にしきりに礼を言って喜び，宿の亭主のところへやって来て，ある人が自分たちに十二グルデンくれたと言いました。亭主は仕度をして，盲人たちに食事を出しました。そして，盲人たちは数日良い暮しをしました。その後で，亭主は言いました。「さあ，皆さん，一度清算しましょう。」盲人たちは，「はい」と言いました。亭主は盲人たちに，十二グルデン分の食事や寝酒を勘定しました。そこで亭主は言いました。「十二グルデン持っている人は出して下さい。」皆が自分は持っていないと言い，彼らのうちの誰も十二グルデンを持ってはいませんでした。亭主は腹を立てて言いました。「お前たちがこうやって私の物を騙し取ろうとしたとは結構なことだ。ごろつきども，お前たちにはそれを身体で払ってもらわにゃならんぞ。」そうしてかわいそうな盲人たちをがちょう小屋に閉じ込めて，パン以外には何も食べ物を与えませんでした。しかも十分にではありませんでした。

盲人たちを苦境に追いやった騎士は考えました。「お前はあの盲人たち

がどうなったかちょっと見なくちゃならんぞ。」そしてその宿屋へ馬に乗って戻って行き，十二人の盲人たちががちょう小屋にいるのが聞こえました。騎士は亭主に言いました。「あれは何の騒ぎだね。」亭主はことの次第を騎士に話しました。騎士は言いました。「御主人，あなたは保証人を受け入れて，あのかわいそうな人々を出してやってくれませんか。」亭主は言いました。「ええ，それでも結構ですよ。保証人を受け入れましょう。」

騎士はその地区の司祭のところへ行きました。さて，司祭館は村から遠く離れていました。司祭は悪魔に取りつかれた人の悪魔祓いをすることができました。騎士は司祭に言いました。「司祭殿，兎亭の亭主は昨晩気が狂ってしまいました。亭主は悪魔に取りつかれたと，皆が言っています。私はおかみさんに，あなたに亭主を治してくれるように頼んでくれと言われてやって来ました。そのことでおかみさんはあなたに十分に報酬を出すと言っています。」司祭は言いました。「私はまだ十四日間はそのことに対して何もできません。しばらく待っていただかねばなりません。」騎士は亭主の所へ行って，言いました。「司祭様が十二グルデンの保証人になってくれました。司祭様はそれを十四日後に果たすと言っています。おかみさんを私と一緒に司祭様の所へ行かせて下さい。司祭様はそのことをおかみさんの前でも約束したいのだそうです。」亭主は妻に言いました。「行って，本当かどうか見てきなさい。」おかみさんが司祭の所へやって来ると，騎士は言いました。「司祭様，あなたが私におっしゃったようにおかみさんに，言ってやって下さい。」司祭は言いました。「はい。あなたはしばらく待たねばなりません。十四日後にその件に決着を着けてあげましょう。」おかみさんはそのことを亭主に言い，亭主は盲人たちを解放してやりました。そしてそのいたずら者も去って行きました。

十四日が過ぎると，亭主は妻に司祭の所へ十二グルデンを取りにやらせました。司祭は言いました。「私はあなたに何も借金はありません。私は十二グルデンのことなど知りませんよ。私はあなたの御主人の悪魔祓いをするように頼まれました。あなたの御主人は取りつかれているのだそうです。」おかみさんは言いました。「私の主人は正気ですよ。あなたは主人に十二グルデン払って下さらなければなりません。」おかみさんは亭主に司祭の返事を言いました。

亭主は腹を立てて，下僕を一緒に連れて行きましたが，それぞれ肩には一本の矛槍を担いでいました。司祭は戸口に立って，隣人にも矛槍を持って自分の所へ来るように呼び，言いました。「皆さん，ご覧なさい。あの人たちは悪魔に取りつかれているから，人々から金を取ろうとしているのです。」こうして，亭主が十二グルデンを要求すると，司祭は必要ならば亭主の悪魔祓いをしてやろうと言いました。それでその件はまだ係争中なのです。